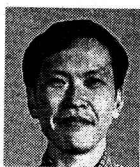


◆アフガン難民 支援は今後も必要だ



いつく岩肌から雪混じりの砂あらしが、たまたまけるように診療テントに吹きつける。医薬品は必ず密封しておかないと、たちまち錠剤が砂をかぶってしまふ。砂漠の砂は細かく、小さなすき間も逃さない。

医療NGO(非政府組織)のAMDA(本部・岡山市)が、パキスタンのクエッタにあるラティファバード難民キャンプとムハンマド・ケイル難民キャンプに救援医療テントを開設して2カ月になる。アフガニスタン東南部に近い岩山の

医療NGO「AMDA(アムダ)」
緊急救援対策局長
小西 司

ふもどに設置されたこの二つのキャンプには、すでに6万人を超すアフガン難民が到着した。

アフガニスタン東部や西部ではすでに難民の帰還が始まり、復興の機運が高まっている。一方で、最近も銃撃戦があったカンダハル地方につながるクエッタ周辺には、今も難民の流入が続いている。

診療テントには電気も水道もないが、医療を求めてくる患者は毎日2000人を超える。AMDAの緊急医療チームは5人の医師を含めて38人。うち日本から看護師とスタッフ各1人を派遣している。

栄養失調、発熱、下痢、不眠を訴える人々と、大や

けどを負った子ども、腕を失った男性。診療テント開設2日目に難産の末に生まれた女児に続き、連日のように出産が続いた。限られた人員に限られた医薬品、医薬品不足が深刻だ。

私が同難民キャンプに入ったのは昨年12月だが、日本人がどれだけアフガニスタン、そしてアフガン難民に関心を持ち続けていくれるか不安だった。

果たして2月上旬に帰国した時、ほとんどの報道は「平和の祭典」オリンピックに変わっていた。つい先ごろまで毎日のようにアフガニスタンでの戦闘について報道されていたのに、目のくらむ思いがする。

私たちの活動を支えてくれるアフガン難民への募金も昨年10月は873人の方々からいただいたが、1月になると89人に減った。

AMDAは97年にアフガニスタンのヘラートで保健診療活動を始め、98年から東北部のアズロとティジンでも実施した。しかし、国連諸機関やNGOが活動していたため、緊急医療に重点をおくAMDAは撤退し、洪水に見舞われたモザンビークやカンボジア、地震が起きたトルコ支援などに主軸を移した。

昨年10月、空爆開始とともに5人の医療チームを派遣したが、空白期間があったためか協力しなかった医療関係者と連携がとれ

ず、一時、緊急支援を断念した。この時、支援を持続する重要性を痛感したのである。

国連機関によると、カンダハルを中心としたアフガニスタン南部への帰還作業は、3月から1年間かかるという。AMDAのテントを訪れる人たちがとって、復興は遠い先の話なのだ。難民が故郷へ帰るころ、国際的な関心はさらに薄れ、復興支援も先細りになるのではないかと懸念する。

クエッタ周辺では欧米のNGOも救援活動をしているが、日本からスタッフを派遣して本格的な活動をしているのはAMDAだけだ。今度はこの地にごまりたいと考えている。周囲の無関心は、難民の生活と明日への希望を持つことをさらに困難にするのである。